



TITLE:

# 境界線を侵食する「癒しの共同体」：接触領域としての在日フィリピン人社会

AUTHOR(S):

日下, 渉

---

CITATION:

日下, 渉. 境界線を侵食する「癒しの共同体」：接触領域としての在日フィリピン人社会. コンタクト・ゾーン 2012, 5: 124-144

ISSUE DATE:

2012-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/177253>

RIGHT:

# 境界線を浸食する「癒しの共同性」

——接触領域としての在日フィリピン人社会

日 下 渉

## 1 はじめに

グローバル化の進展は、世界各地で排除と包摂の複雑なプロセスを引き起こしている。アパデュライ〔2004〕が指摘するように、国境を越えた人と情報の大規模な移動は、差異化と同質化のプロセスを同時に伴いながら、特定の土地に根ざした階層やエスニシティといった近代的カテゴリーを不安定化・流動化させている。本稿では、このような複雑なプロセスの一端を検討するために、在日フィリピン人社会を階層的に分断された移民同士が出会う「接触領域」として捉え、そこで生じる両者の関係性の動揺に着目したい。

フィリピン社会に存在する莫大な階層格差は、人びとが生まれ育ち、生活する社会空間を分断し、利益と道徳をめぐる深刻な対立を引き起こしてきた。もともと大地主に代表されるごく一部の富裕層と貧困層の対立が着目されてきたが、近年では中間層と貧困層の対立も看過できない。支配的な新自由主義イデオロギーのもとで、中間層は法を遵守して勤労する正しき「市民」を自任する一方で、貧困層を墮落した生業や違法行為、あるいは福祉への依存によって暮らす悪しき「大衆（非市民）」として見なす傾向があるからである〔日下 2008〕。

このような分断は、在日フィリピン人社会にも反映されている。在日フィリピン人の多くは比較的貧しい生まれの女性たちで、クラブなどで「エンターテイナー」として働き、日本人と結婚（その後の離婚も多い）した経歴を持つ。他方で、数的には少ないものの、中間層出身で高等教育を受けたフィリピン人も日本で移住生活を送っている。日本政府の国費留学生、IT 技術者、教員・弁護士などの専門職、日本人と結婚した高学歴の人たちであり、彼らは「在日フィリピン人エリート」を構成している。彼らの悩みのひとつは、「貧困」「危険」「売春」といった日本社会におけるフィリピンの表象から完全には自由になれないことである。

この両者は、日本社会でいかなる関係を形成しているのだろうか。在日フィリピン人エリートは自らの優越性を主張することで、否定的に表象されてきた（多くの場合は女性の）下層移民から自らを差異化しているかもしれない。あるいは、フィリピン人一般への否定的な表象に対する反発から、両者が階層を超えたエスニックないしナショナルな絆に基づいたアイデンティティを強化することでマイノリティの権利を主張しようとするアイ

デンティティの政治を展開しているかもしれない。

しかし、結論を先取りすると、在日フィリピン人社会では、階層分断ばかりが再生産されているわけでも、強固なアイデンティティの政治が主張されているわけでもない。むしろ、フィリピン社会では出会うこともなかったような異なる階層に属する人びとが、異国で生きる寂しさや苦しみ、困難を互いに支え合うことで、道徳的・階層的軋轢を内包しながらも、それを侵食するかたちで「癒しの共同性」を創出している。

以下では、まずフィリピン人移民に関する主な先行研究を検討し、次にフィリピン人女性エンターテイナーに対して支配的な表象を確認しておく。そのうえで、在日フィリピン人社会における階層分断の再生産と、それを越えて新たに創出される共同性の特徴と可能性を論じたい。

## 2 フィリピン人移民研究

経済的停滞を背景に、フィリピンは多くの海外契約労働者を送り出してきた。その数は2005年の時点で988,615人にのぼり、人口の実に1割程度が海外で働いている。このような背景から、フィリピン人移民については多くの研究蓄積がある。また圧倒的に女性が多いという「移民の女性化」を反映して、それらの多くは女性を研究対象としている。

こうした研究のなかには、まずフィリピン人移民女性を搾取し抑圧する構造的要因を明らかにし、告発する研究がある。たとえば、バレスカス [1994] やドーン編 [2005] は、フィリピン人女性を日本に送り込み、莫大な利益をあげる合法・非合法の制度やネットワークの実態に迫ると同時に、被害者である彼女たちを救うためとしてエンターテイナー・ビジネスの全面禁止を主張している。もっとも、フィリピン人移民女性は、移住先社会で一方的に同化されたり、排除・抑圧されるだけの無力な被害者ではない。このような視座から、周縁的な状況を余儀なくされつつも、支配的な制度や表象に対して交渉・抵抗するフィリピン人女性の「エイジェンシー」についても多くの研究がなされてきた。

コンスタブル [Constable 1997] は、香港のフィリピン人家事労働者が、雇用主らによって「勤勉で従順な家事労働者」へと主体化されつつも、「日常型の抵抗」を行っていることを論じた。また、パレーニャス [Parreñas 2001] は、ローマとロサンジェルスでのフィリピン人家事労働者による「部分的な市民権」、家族との別離、社会的排除に対する交渉・抵抗を論じている。徐 [2008] は、在韓米軍基地村で働くフィリピン人エンターテイナーが、人身売買や強制売春の単なる犠牲者に甘んじることなく、無礼な米兵や悪質なオーナーに対して様々な抵抗や交渉を実践していることを論じている。

在日フィリピン人女性研究でも、同様の視座から研究が行われてきた。鈴木 [1998] は、日本人男性と結婚したフィリピン人女性が、自らの民族性や国民性を提示することで、彼女たちを抑圧する象徴的支配を揺るがし、自身の肯定的主体性を主張していると論じている。また佐竹とダアノイ [2006: 92-98] も、農村のフィリピン人花嫁が、イエ制度を維持する「従順な妻」になることを要求する社会に対して、配偶者の親との同居の拒否、都市への引越し、離婚などを通じて抵抗していると指摘している。

彼女たちが支配的な構造に抵抗する際には、同胞や日本人とのネットワーク形成が重要な役割を果たす。マテオ [2003] は、在日フィリピン人が特定地域に集住しなくとも、毎週日曜日にカトリック教会に集うことによって「折りたたみ椅子の共同体」を形成し、様々な相互扶助を実践していると論じた。同様に高畑 [2003] も、在日フィリピン人女性が困難な状況を強いられながらも、直面する問題の解決のために様々な相互扶助のネットワークを作り上げてきたことを指摘している。また永田 [2011] は、支配／抵抗という二項対立を否定して、国民国家を越境する「トランスナショナル・フィリピン人」が、強者である日本人の論理を取り入れたりして日本人と新たな社会関係を構築することで、非対称な関係を変容させる「戦術」を実践していると論じている。

これらの研究は、フィリピン人移民が移住先社会で一方的に排除される無力な存在ではなく、支配的な構造に規定されながらも、それを変革しうる主体であることを示した点で重要である。しかし、一方でフィリピン人移民の間に存在する階層的な軋轢を看過している。ピンチェス [Pinches 2001] が指摘するように、フィリピンの貧困層は、海外契約労働によって社会的上昇を果たしたとしても、富裕・中間層から「嗜好や洗練に欠けた者」という否定的な眼差しを受けている。

しかも階層的に優位なフィリピン人は、移住先社会でフィリピン人一般に対する排除と周縁化に対抗しようとする際に、フィリピン人移民の間における階層的な分断を強化する傾向がある。アギラー [Aguilar 1996, 2003] によれば、シンガポールで専門職の移民は「フィリピン人は家事労働者」といったステレオタイプな眼差しに悩まされ、言語や行動からフィリピン的要素を除いたり家事労働者を避けることで、自らを象徴的・空間的に差異化しているという。他方で、関 [2009] によれば、トランスナショナルな社会空間では、フィリピン人移民、彼らを支援する NGO、草の根住民組織の間で、階層間の反目と拮抗を含みつつも暫時的に生成する公共性が存在しているという。

このように、移住先のフィリピン人社会では、階層分断の再生産と、新たな公共性ないし共同性の創出という二つの背反する現象が生じていると指摘されている。しかし、いかなる条件において階層分断を越えた新たな社会関係が形成されるのか、またその特徴が何であるのかについては、十分な検討がなされていない。本論では、在日フィリピン人社会を対象に、これらの問題を検討したい。

### 3 在日フィリピン人表象と道德の境界線

アギラーが指摘したように、中間層出身のフィリピン人移民は、貧困層出身の移民から自らを差異化しようとする傾向を持つ。彼らは移住先社会におけるフィリピンのイメージを、貧しいフィリピン人が作り出した偏ったものであり、否定的・侮蔑的なものとして受け取るからである。日本社会でも、一般にフィリピンはあまり肯定的なイメージでは語られない。授業で学生にフィリピンのイメージを尋ねてみると、「貧困」「犯罪」「売春」と<sup>1)</sup>といった言葉が並ぶ。日本社会におけるフィリピン・イメージの形成にあたって重要な役割を果たしてきたと考えられるのは、フィリピン人女性エンターテイナーの存在である。

法務省の在日外国人登録者数によれば、2008年の在日フィリピン人数は210,617人であり、中国、韓国、ブラジル人に次いで4番目である。パブやクラブなどで働くフィリピン人は、「興行」ビザの発給を受けている。興行ビザの発給数は、2004年には85,479件であった。しかし2005年にアメリカ国務省は、日比両政府が女性の人身売買に関与していると批判する。そして、これを受けて日本政府が興行ビザの資格認定を厳格化した結果、2006年には5,848件へと激減した。

日本で「水商売」に従事するフィリピン人女性は、1970年代後半から80年代にかけて「ジャパユキ」と呼ばれた。この言葉は近年の日本では死語になりつつあるが、フィリピンでは一般的な言葉として広まり現在でも使われている。ダアノイ [2000:140-146] の調査によれば、フィリピンにおける「ジャパユキ」の一般的なイメージとは、エンターテイナー、歌手、ゴーゴーダンサー、売春婦、日本人の「遊び相手」、日本人の妻などである。そしてマス・メディアが、このようなイメージの普及に重要な役割を果たしてきたという。

1991年、福島県のクラブでダンサーとして働いていた22歳のフィリピン人女性が死亡する事件が起きる。この事件をきっかけに、「ジャパユキ」がフィリピンのメディアによって盛んに取り上げられるようになった。福島の地元病院は、彼女の死因を肺炎による病死と断定したものの、母国で遺体を検視したフィリピン人医師は、他殺の疑いが濃いと診断した。フィリピンでは事件の真相をめぐって盛んに報道が行われただけでなく、1993年にはこの事件を主題とする映画「ジャパユキ——マリクリス・シオソン・ストーリー」(*Japayuki: Maricris Sioson Story*) が公開された。この映画は、死亡したフィリピン人女性をナショナルな義憤の対象に仕立てあげるかのように描いて、実際にはドラッグ漬けにされた彼女の奴隷の状況や性的虐待、そして惨殺される姿を観衆の好奇の目にさらすかのように描いた。こうした在日フィリピン人女性に関する映画や報道は、日本の裏世界と関わりを持ち「絶望的に貧しく救いのない性奴隷」といった否定的な「ジャパユキ」像を構築していった [佐竹&ダアノイ 2006:21-22; 84]。

同様に1990年代の日本社会でも、在日フィリピン人女性をテーマとする数多くの映画やテレビ・ドラマが公開された。久田恵による同名ルポルタージュを原作としたドラマ『フィリッピーナを愛した男たち』(1992年、水島総脚本) は、在日フィリピン人女性を「金銭のためには何でもするしたたかな存在」 [笠間 2002:126-127] として描いた。清水 [1996:17] は、こうしたドラマが、「外見や外面を上手に繕い、魅力的に振る舞い、男を引きつけ騙す」フィリピン人女性と、「内面の真面目と誠実さゆえ、翻弄され貢ぐ」日本人男性という、対比的なステレオタイプを構築するものと論じている。<sup>2)</sup>

また、『月はどこに出ている』(1993年、崔洋一監督) は、フィリピン人女性を肉体的な魅力と自由奔放な言動を持ち、困難に翻弄されながらもたくましく生きる水商売の女性として描いた。この映画において、フィリピン人女性は魅力的であり、必ずしも差別的に表象されているわけではない。だが、彼女は観衆が深く自ずから感情移入していく対象ではなく、あくまで日本人男性による欲望と消費の対象として描かれている。<sup>3)</sup>

これらの映画やドラマで主演を演じたのは、フィリピン女優ルビー・モレノである。



彼女自身は、自らが演じた役柄について次のように回想している。

ほとんどの役は、じゃぱゆきさんというステレオタイプのフィリピン人女性を描いたものばかりでしたが、私の日本でのそれまでの生活を重ね合わせてみると頷けるようなものばかりだったことも事実です。それでもあるドラマにこんなシーンがありました。ホステス役の私が、日本人の客に札束を見せられながら「どうせやることはひとつだろう」と言われるシーンです。いくらお芝居とはいえ、私はさすがにスタジオから帰る電車の中で悔しくて涙を落したものです [モレノ 1994:142]。

このような表象は、日本で生活するフィリピン人女性に具体的な差別や抑圧をもたらす。フィリピンでは、彼女たちは売春で生計を立てる「国辱」とみなされたり、空港で入国審査官から侮蔑的な言葉を投げかけられたり、タクシー運転手から法外な値段を要求されたり、家族・親族からもしばしば否定的な噂話の対象となってきた [鈴木 1998:106]。日本では、エイズ患者であるという医師の偏見による病院での診察拒否、日比混血児に対する学校でのいじめ、夫からの罵りや暴力、初対面の人からどこのクラブで働いているかを尋ねられる、といった体験である [ゴウ&鄭 1999:148-157]。

名門フィリピン大学を卒業し、当時日本で生活していたリサ・ゴウは、次のようにメディアに対する怒りをぶつけている。<sup>4)</sup>「日本のメディアがフィリピン女性に無理矢理あてはめようとするふたつのステレオタイプ——家族を支えるために身を売るかわいそうな娘さんといった被害者像、そして、金のためにセックスを利用して発情するセックス・マニャック——に私たちはほとんどうんざりさせられていました」 [ゴウ&鄭 1999:78-79]。

もっとも、このような表象は社会的状況の変遷に伴って変化していくものである。東 [2009:5] は、1990年代後半以降、在日フィリピン人女性の社会的役割が出稼ぎエンターテイナーから妻や母へと変化したことを背景に、「より正しく現実的なイメージが形成された」と指摘している。<sup>5)</sup> また、2005年以降の興行ビザ発給の厳格化と、2008年の日比経済連携協定による看護師・介護士の受け入れは、より肯定的なイメージの形成に寄与するかもしれない。<sup>6)</sup>

しかし他方で、近年の新自由主義イデオロギーは、経済に貢献し納税するセクターと福祉に依存するセクターを分断し、後者に対する敵意を昂進している。これに伴い、外国人移民を「潜在的な福祉受給者」、もしくは「犯罪者予備軍」としてみなす傾向も強まっている。そのことは、不法入国したフィリピン人夫婦とその子供が2009年に国外退去させられた「カルデロン家事件」をめぐって、「在日特権を許さない市民の会」が行ったデモや、インターネット上などに書き込まれた言説にも<sup>7)</sup>顕著であった。

貧しい「売春婦」であれ、男を騙す「したたかな商売女」であれ、法を侵犯する「犯罪者」であれ、ここで共通しているのは彼女たちを階層的にだけでなく、道徳的にも劣った存在としてみなす表象である。日本人も、在日フィリピン人エリートも、こうした表象を内在化することによって、彼女たちを排除するのであれ、救い出そうとするのであれ、自分と彼女たちの間に道徳的な境界線を<sup>8)</sup>引く。在日フィリピン人社会における階層分断は、

こうした道徳的な境界線によって正当化され、再生産されている。具体的な事例をみてみよう。

## 4 接触領域としての在日フィリピン人社会

### 4-1 調査の概要

私はこれまで暮らしてきた福岡市と京都市において、日頃からカトリック教会を中心とする在日フィリピン人の集まりに参加してきた。ただし、これはもともと調査目的であったわけではなく、一時的にフィリピン化、祝祭化する空間に身を置くことで、気晴らしや癒し<sup>9)</sup>を欲していただけである。

2003年4月に私はフィリピンでの長期調査を終えて福岡に戻り、先の見えない孤独な研究生生活を送るようになると、福岡でもフィリピン人とタガログ語やビサヤ語で冗談を言い合って大笑いするような機会を求めるようになった。中州や親不孝通りのバーを借り切って行われたパーティでは、フィリピン人たちと酒を飲み朝まで踊ったことを思い出す。2008年10月から暮らしている京都でも、研究者以外との人付き合いを欲して、自然とフィリピン人の集まりに顔を出すようになった。そうしているうちに、家庭裁判所での離婚調停や親権調停の通訳として、困難に直面しているフィリピン人女性を支援する活動にも巻き込まれていった<sup>10)</sup>。そうすると、今度は同様の支援活動を行っているフィリピン人留学生や、かつてDV被害にあったフィリピン人女性とも自然と親しくなった。

以下でとりあげるインタビューは、私が在日フィリピン人社会と関わり合いながら暮らすなかで出会った友人を対象に、2009年8月から2011年4月にかけて断続的に行ったものである。インタビューは会話の流れに応じて日本語、英語、タガログ語を併用して行った。なお、表記した名前は全て仮名である。

### 4-2 境界線の再生産

日本の多くの地域では、カトリック教会の英語ミサの運営を担当する信徒団体が在日フィリピン人組織としての役割を果たしている（写真1）。福岡市の大名カトリック教会では、Filipino & Friends in Fukuoka (FFF) という組織が活躍している。主なメンバーは、かつてエンターテイナーとして働き日本人と結婚した女性たちである。本稿では、彼女たちのことを、ひとまず「元エンターテイナー」と表記しておきたい<sup>11)</sup>。九州大学の留学生はミサには参加するものの、その後の食事会や、独立記念日パーティ、クリスマス・パーティといったイベントには参加しない。彼らは、組織の活動を仕切る元エンターテイナーの女性たちに距離感を感じているからである。

そのような一人にルーイ（男性、1977年生）がいる。彼はマニラ首都圏ケソン市の裕福な家



写真1 カトリック河原町教会の英語ミサ

庭で生まれ、アテネオ大学で経営学を学んだ後、フィリピン大学法科大学院に進学し、2004年には司法試験を2位の成績で合格した。その後、フィリピンの法律事務所や証券取引所で弁護士として働き、2007年に国費留学生として九州大学大学院に入学した。彼は、元エンターテイナーの女性たちと距離を置く理由を次のように述べた。<sup>12)</sup>

本音を言えば、教会で見かけるフィリピン人女性の多くはクラブで働いている印象があるので、彼女たちのことを無視してきた。自分は弁護士で、彼女たちとは違うという気持ちもある。なぜそうしたかという、フィリピンからの習慣のせいかもしれない。フィリピンでは人種差別はないけれども、経済差別があるからだ。私には水商売の女性の知り合いはいない。本音を言えば、フィリピン人女性が集まってうるさく騒いで周りの人に迷惑をかけるのが嫌だ。彼女たちは、日本におけるフィリピンのイメージを悪くしていると思う。だけれども、彼女たちは他に仕事の機会がないから水商売の仕事をしているわけで、しかも、それは違法ではない。だから、それは恥ずかしいことではないし、彼女たちを悪くは言うことはできない。おそらく彼女たちよりも、カルデロン家のような法律を守らずに日本で暮らす不法滞在者の方が問題だ。

また、日本人と結婚した中間層出身で高学歴の女性も、元エンターテイナーに違和感と反目を抱えている。九州で暮らすフィリピン人を対象に入念な参与観察を行ったロペズ [Lopez 2012] は、マルジャ（女性、1968年生）の語りを紹介している。彼女は、フィリピン大学修士課程で数学を研究しながら、語学学校で外国人に英語を教えていたところ日本人男性と出会い、1992年に結婚をして来日した。彼女が福岡に来た時、他のフィリピン人はみな「ジャパユキ」ばかりで、とても当惑したという。

私は彼女たちを軽蔑していたし、話しかけたくもなかった。私は漫画を読まないし、男の子やお金について話をしないし、バーでお酒を飲まないし、人を騙そうなんて考えたこともない。何かが欲しければそれに向けて働くべきだし、問題があっても自分で解決できるのであれば安易に他人に助けを求めてはならない。私は彼女たちと違って、そのように育てられた [Lopez 2012: 147]。

こうした彼女の語りからは、自らを他のフィリピン人女性から差異化する道徳的な境界線を読み取ることができる。さらに、道徳的な境界線による差異化は、知的、経済的な境界線の再確認によって重層的に強化される。再びロペズから、マルジャの語りを引用してみよう。

ある日、あるフィリピン人女性の日本人の夫が、「うちの嫁はバカで、地図のなかのどこにフィリピンがあるかさえも知らないんだ」と言った。それに対して、彼の妻は「フィリピン人は、誰もそんなこと知らないわよ」と私に相槌を求めた。彼女たちはとても美しいのだけれども、フィリピンが地図のどこにあるのかさえも知らない。そ



して、それを日本人によってバカにされている。そのことが、私にはとてもショックだった。その時、私は彼らに対して一生懸命説明をした。すると、その日本人の夫は教育を受けたフィリピン人がいることを理解し始めたようで、「やっぱり、マルジャは違うなあ」と言った。

またある時、私の旦那が、ある日本人から「フィリピン人と結婚しているなら、毎月20万くらいを彼女の実家に送金しているのですか」と聞かれたことがあった。私たちは一切仕送りをしていないからとても当惑した。彼らの考えは、あまりに凝り固まってしまっている。フィリピン人と結婚したら、ずっと大金を貢ぎ続けなくてはならないなんて、そんなバカげたことはない [Lopez 2012:147]。

京都市のカトリック教会に通うメルヴィン（男性、1978年生）も、元エンターテイナーに対する違和感を認めている。彼はフィリピン大学工学部を卒業後、電子機器会社で働き、2003年から国費留学生として来日して2009年には京都大学で博士号を取得し、現在は京都大学で勤務している。<sup>13)</sup>

もちろん壁はある。たとえば、教会でミサの後に談話をする時も、学生とジャパユキはそれぞれ別のグループに分かれて話をしている。共通の話題がないからだ。お互いに関わり合って理解し合おうすることはない。恥ずかしいけれど本当のことを言えば、自分自身にも彼女たちを差別する気持ちはある。

もっとも、彼は2種類の「ジャパユキ」がいることを指摘して、友人になれる人たちと、そうではない人たちがいると語る。

ひとつは、派手な服を着て学生には近づかない人たちだ。おそらく私たちに遠慮をしているのだろう。私は、彼女たちの下品であまりにセクシーすぎるファッションが好きではない。もうひとつは、私たちに近づいて話しかけてくる人たちだ。彼女たちは結婚していてファッションも落ち着いたものになっているし、友達になることもできる。

ここで指摘されているように、ファッションは、在日フィリピン人エリートがエンターテイナーとして働いた経歴を持つ女性と付き合うかどうかを判断する重要なマーカーになっている。

また、フィリピン人女子学生にとって、ファッションはエンターテイナーとして眼差される危険を回避し、自尊心を守る重要な意味を持つ。彼女たちは日本人やフィリピン人から「どこのお店で働いているの」などと尋ねられて、苛立つ経験にしばしば直面してきた。ある京都のフィリピン人女子学生は、教会で「バーで働くよりいいよ」と日本人から介護士の仕事を勧められたため、<sup>14)</sup>「全てのフィリピン人はジャパユキじゃないでしょ」と怒ったという。それゆえ、彼女たちはジャパユキとして眼差されないように、あえてシンプル

で落ち着いた服装をすることを心掛けている。「私はエンターテイナーではない」という彼女たちの自尊心は、言語によってもアピールされる。たとえば、九州大学で修士号を取得し、東京の国際法律事務所で弁護士として働くローズ（女性、1975年生）は、「悪い外国人」として見られて不快な体験をしないようにと、日常生活を送るうえで常に英語で話をするようにしている<sup>15)</sup>。

このように、在日フィリピン人社会では、学歴、服装、言語、会話の内容などの違いに基づいて階層的な断絶と排除が再生産されている。とくに高学歴の女性は劣位の眼差しを拒絶し、自らの階層的、道徳的な優越性を主張するために、言語やファッションを重要な標識として利用している。だが、メルヴィンが語ったように、エンターテイナーが仕事を引退して母親として生活するようになることで、学生はより容易に彼女たちと関係をつくることができるようになる。今度は、京都のフィリピン人社会を事例に、そのような契機に目を転じてみよう。

#### 4-3 境界線の越境者たち

京都市内のカトリック教会では、通称 Pag-asa と呼ばれる Kyoto Pag-asa Philippine Community というフィリピン人組織が英語ミサの運営に携わっている。Pag-asa とは、タガログ語で「希望」を意味する言葉である。この組織は、1985年にフランシスコ会のシスター、大学教員、日本人と結婚した大卒の女性、そしてエンターテイナーたちによって創設された。それゆえ、設立当初から階層横断的な特徴があった。とりわけ、当時この教区を受け持っていたシスターは、エンターテイナーや学生といった肩書きを問わず、積極的に多様なフィリピン人を Pag-asa の活動に巻き込もうと働きかけた。私が調査を開始した2008年の時点では、エンターテイナーを引退して、様々な生計によって収入を得ながら家族を支える女性たちが Pag-asa の運営において主要な役割を担っていた。ただし様々なイベントでは、留学生がプログラムの作成と運営の点で重要な貢献をしており、元エンターテイナーの女性は学生の企画・運営力を頼りにし、ありがたく思っていた。

ここではとくに積極的に Pag-asa の活動に関わったり、元エンターテイナーの女性たちと親密な関係を築いてきた学生の語りを紹介してみよう。まず吉澤 [2010] が、京都で在日フィリピン人を支援する様々な活動を行っているデニス（男性、1979年生）に詳細なインタビューを行っている<sup>16)</sup>ので、これを参照してみたい。

彼はパナイ島イロイロ市出身で、大学教員の母親と NGO 活動家の父親を持つ。アジア開発銀行の奨学金で来日し、現在は京都大学の博士課程で経済学を勉強している。彼は来日以前から、在日フィリピン人女性は教育がなく、ホステスや水商売をしているという悪いイメージを抱いていた。また来日後には、法と社会のルールを破るフィリピン人のイメージが強くなったという。とりわけカルデロン家事件を引き合いに出して、彼らのようなフィリピン人が日本におけるフィリピン人イメージを悪くしていると強く批判した。

だが他方で、彼は教会で知り合った元エンターテイナーの女性から中華料理店でアルバイトを紹介してもらった。また、そこで昼は中華料理店で、夜はホステスとして働くフィリピン人女性たちと出会い仲良くなった [吉澤 2010:17]。また、家庭裁判所やフィリ

ピン人の母親を持つ子供が通う小学校で、タガログ語やセブアノ語の通訳をボランティアで日常的に行ってきた。彼がこうした活動を始めた理由は、「良いフィリピン人」たることを実践し、困難な状況のなかにいる同胞に貢献するためである。だが、元エンターテイナーに対して「教育がない」「マナーが悪い」といった違和感は依然として残るという。

ここにいるのは農村から来ている女性たちで、マナーとか悪くてうるさい。もっと周りを考えて、どう動くかを考えた方が良い。僕のスタンダードが高いけど、ちょっと考えたら迷惑とか分かるでしょ。でもうるさい人間がいる。で、またイメージが悪い。(中略) 楽しい、賑やかなのは良いけど、ある場所では適切な行動がある。公共的なところだと、うるさいとちょっとね。だけど、みんなは認識してないから悪いことばかりやっている。イメージはどんどん悪くなっちゃう。日本には良いフィリピン人は少ないと思う [吉澤 2010:17-18]。

彼はアルバイトや通訳ボランティアの経験を通じて、「ジャパユキ」という集合的な表象ではなく、個々の女性たちと出会うことによって肯定的なイメージを獲得してきた。たしかに彼女たちに対して違和感を抱いているものの、「法を守る」限り関係を取り結ぶことができるという考えを実践している。吉澤 [2010:39] は、このような関係を、緊張と矛盾をはらみながらも、人びとを分断する境界線を揺るがす可能性のあるものとして評価している。

しかし、学生と元エンターテイナーの関係は、学生の支援活動によって取りもたれるものだけに限られない。両者の間には、より親密かつ情緒的で、癒しを与え合うような関係もつくられている。そのような関係をつくりだしている学生の一人に、ディナ（女性、1978年生）がいる。彼女は地方中間層の家で生まれ、フィリピン大学で哲学を勉強した後、2004年に同志社大学に留学し社会学を専攻し、2011年5月に博士号を取得した。彼女は日本で研究活動を行いながら、Pag-asa によるイベントの企画運営や、在日外国人を支援する様々な NGO 活動にも関わっている。

もともとディナが元エンターテイナーに関わり始めたのは、研究対象として関心があったためである。彼女は修士論文執筆のために調査をしようと、フィリピン人が集まる教会や、マイノリティに雇用機会を提供しているバザール・カフェという喫茶店、在日外国人女性を支援する NGO の APT (Asian People Together) などの活動に参加するようになった。そうしているうちに、ディナは元エンターテイナーの女性たちと親しくなり、家でご飯をご馳走になったり、一緒にカラオケにいくなどの付き合いを深めるようになり、「はじめは調査者と対象者だったけど、家族ようになっていった」という。

ディナの親しい友人の一人に、ジェイ（男性、1979年生）がいる。彼はマニラの都市中間層の家庭で生まれ、国費留学生として来日し京都大学で修士号と博士号を取得した。彼の論文は、自然科学のトップ・ジャーナルである *Nature* 誌にも掲載された。こうした実績が評価されて、2010年4月から日本の大手電子機器メーカーで勤務している。フィリピン本国ではなかなかありえないことだが、このようにエリート的な経歴を持つ彼も、元エ

ンターテイナーの女性と親密な関係を築いている<sup>17)</sup>。

ディナとジェイは、「エンターテイナー」や「ジャパユキ」という言葉は使わず、「お姉さん」(アテ: *ate*) という言葉を使う。彼らは「お姉さん」たちが直面している子育てや、日本人の(元)夫との関係など、様々な問題についてアドバイスをしたり、学校や役所の書類を翻訳するなどの手助けをしている。パソコンの使い方を教えたり、彼女たちの子供に英語を教えたりもしてきた。しかし、彼らはこうした関係を支援—被支援の関係では捉えていない。たとえばディナは、マリアという女性との付き合いを次のように語っている<sup>18)</sup>。

お互いに何か学ぶ。お互いの世界が見える。だって留学生同士ばかりだと先生の話とか、そんなのばかり。でもマリアと話しをすると、子育てとか、日本人と結婚する状態とか、イメージが見えるようになる。

一方通行な関係じゃない。お互いにポジティブな何かをもらっている。私が彼女からもらっているのは、たぶんコンフォート(癒し)。仕事とかいろいろ問題があったら、相談というよりも、誰かと話したいでしょ。だから、寂しい時はマリアのところに行って「お姉ちゃん、ご飯作って」(笑)。

私は家族と離れているけど、家族としてマリアがいるから。だから、お母さんの料理を食べたい、みたいな気持ち。そして仕事でストレスがあると「日本社会はなんでこんななの」とか文句を言う。

このようにディナやジェイは、マリアにフィリピンの料理をふるまってもらい、話し相手になってもらうことで、家族や故郷を離れて京都で一人暮らしを送る心身を癒す貴重な機会を得ている。

#### 4-4 「汗と涙」の滞日経験

ディナやジェイが親しく付き合っているマリアは、かつてエンターテイナーとして働いた経歴を持つ。彼女は自らの過去を振り返る時、何度も「汗と涙やな」と繰り返す。今度は、彼女の「汗と涙」の滞日経験に耳を傾けてみよう<sup>19)</sup>。

マリアはフィリピンでも最貧地域のひとつとされるサマル島出身で、父親は警官、母親は高校教師だった。住民の多くが農民のなかでは比較的恵まれた家庭だったが、7人の子供がおり生活は楽ではなかった。彼女は地元の美人コンテストに出場した時、地元の名士である国軍将校の夫妻に気に入られた。この夫妻はマリアの両親に話をつけて息子が勉強しているセブの私立大学に入学させ、二人を結婚させようとした。

彼女はセブでこれまで経験したことのない「シンデレラのような」生活を送るが、自分の将来を大人たちに決められてしまうことに「反乱」を起こす。そして、大学を辞めて地元デパートで化粧品などを売る「プロモ・ガール」の仕事をしていた時、日本人プロモーターの目にとまり日本でダンサーとして働かないかと誘われた。彼女の両親は「ジャパユキ」の悪い噂を挙げて大反対した。しかし、彼女は自分の知り合いが日本で働いて大金を手に入れているのを知っていたし、また踊るのが好きだったので、「自分にでもできるはず



だ」と日本行きを決意した。

マニラのエンターテイナー養成所に入寮し、日々厳しいダンスの練習に励んだ。2年後に晴れて国家試験と日本人プロモーターの試験に合格し、20歳の時に12人の仲間と共に奈良に連れられていった。それまでホテルで「カルチャー・ダンス」をすると聞かされていたのだが、初めて「オミセ」に入った時、彼女はこう思った。「なんてことかしら。とても暗いわ。それにすごいタバコの臭い。お父さんが言ったことは本当かもしれない。もしかしたら私が連れられていったのは…。」

彼女はそこで働きはじめて2週間後に、後に結婚する日本人男性と出会う。彼はその店の得意客で、彼女を見初めて大金をお店に支払った。お店の社長はマリアに彼専属として働くように命じた。彼女は彼に会った1日目に10万円を、その後も高価なアクセサリーなどを次々と与えられた。彼女はそれまで仲間たちと共同生活をしていたが、彼にマンションの個室を与えられた。

私、思ったわ。日本はこんなところだったね。圧倒されたわ。私はまるで買われたみたい。驚いたわ。仲間から物欲に目がくらんでいると言われたけど、それは本当。家族からでさえもそう言われた。彼を愛してもいないのに、物欲に目がくらんだの。

マリアは求められるがままに彼との関係を重ね、ついに妊娠してしまう。社長は彼女に対して「なぜ妊娠したのか」とひどく怒り、今のビザで滞在し続けられるために内緒で中絶手術を受けるように命じる。「そのように仕向けたのは彼らだったのに、何故そんなことになるの」と彼女はまったく理解できなかった。しかし、彼女を妊娠させた男性はそのことを聞きつけ、自分が彼女の違約金を支払って彼女と結婚すると社長を説得した。彼女にとって「彼は人生で初めての男性だった。私は彼を愛していなかったけど、初めての男性だから愛することができるようになってはいけないと考えた」。その間の出来事を、彼女はあまりに進展が速すぎてじっくり考えることもできず、「嵐のようだった」と語る。

11年の結婚生活のうち、はじめの2年間はそれなりに幸せな結婚生活を送ったという。だが、建設会社を経営する夫は接待が多かった。毎日夕方4時になると飲みにでかけ、朝帰りする日々が続く、子供と一緒に時間を過ごそうともしなかった。しかも、いつも女性がいるお店にいつて浮気を繰り返した。他のフィリピン人女性からのラブレターがポケットに入っていることもあった。知らないフィリピン人女性の実家に30万を送金していたこともあった。だが、二男が小児癌にかかり入退院を繰り返すようになると、一時的に夫は優しくなった。しかし、子供の病気が治ると、今度は彼の女癖の病気が再発したという。

この時、彼女を苦しめたのは相談する相手がいなかったことである。そもそも両親の反対を無視して決めた日本行きと結婚だったため、フィリピンの家族にも相談できなかった。また、近所のフィリピン人は彼女の夫が怒ることを恐れて、助けの手を差し伸べてくれなかった。悩みを話せる人もおらず、彼女はノイローゼに陥っていった。

なんで私の声、誰も聞いてくれないの。私は旦那さんの声を最初に聞いたのに。好き



じゃないのに最後まで好きになるって頑張ったのに、結果はこれか。

私、ほんとうにおばかや。だって、自殺のこと考えたことあるもん。もう我慢できなかったんよ。自分の傷つくことが。だから、タバコもちょっと吸って、お酒もそれでなんか。旦那さんのタバコから半分くらい取って。それで友達になったんよ、タバコと。お酒も家でずっと飲んでいる。で、旦那さんが帰ってきたら、なんで酔っ払いとか。

そうしているうちにバブル経済の崩壊に伴って夫の建設会社は破綻し、彼は多額の負債を負った。しかし彼は家にお金をいれず、カードを使って毎晩のように飲み歩いた。彼はマリアをストレスのはけ口として扱い、明け方寝ている時に顔を抑えつけ、怒鳴りつけ、モノを投げつけ、蹴飛ばした。

精神的に追い詰められていった彼女の救いになったのは、フィリピン人の友人が市役所で見つけた「問題があれば電話をしてください」とタガログ語で書かれたリーフレットだった。電話をかけたところ、DV 被害者として市役所の婦人相談所、NGO の APT、フィリピン人のシスターを紹介された。離婚を認めないはずのカトリック教会のシスターからも子供のために離婚することを勧められた。

しかし、離婚を決断するのは容易ではなかった。ある時、子供を連れてフィリピンに帰ろうと支援者の協力を得て航空券を買い、荷物も空港に送り、あとは夫のいない隙に家を出るだけとなった。だが、玄関を越えて一歩外へと出ることがどうしてもできなかったという。

私が、おばかなのね。ドアを出るときの気持ちが、もうすごい悲しい。これ出たら人生が変わる。すごい、なんかドラマみたいなの。なんか、ほんまに涙ぼろぼろ。自分が大変なのに、旦那さんの明日寝てるところどうするのかな、朝ご飯どうするのかな、帰ってきたら私たちいなくてどうするのかな？旦那さんのことばかりになって。自分のことは何にも考えてない。子供のことは何にも考えてない。おかしいでしょ？

あの、愛情じゃない。私の場合は最初から愛してるんじゃないで、develop が深い。(彼が) 私のこと好きで、私は合わせるだけ。今度自分が好きになって、そのほうが深い。Love だったら、すぐにこう切れるから、いいわとか。でも、develop だったから、それを取り戻すのが難しい。

で、自分の決めたことやし。だから、その中身で、やっぱり最後までうまくしてほしかった。私、ばらばらなってほしくなかった。

彼女は長く逡巡したが、ようやく2年後に4人の子供を連れて家を出ることができた。そのきっかけとなったのは、高熱にかかって真っ青な顔で吐いている末っ子を、夫が目の前で無視し続けたことである。「その瞬間に下の娘を抱きしめて、もう守ってあげるって、それしか。これでおわり。次の日、何もかもゼロ」。

翌日、彼女はタクシーに飛び乗って夫の家を飛び出した。彼女は APT やシスターの支

援を受けて京都市内の母子寮で生活をはじめ、午前中はホテルの清掃員として、午後は喫茶店で働きながら子育てをするようになる。しかしシングル・マザーとして働き、4人の子供を育てていくのも、「汗と涙」の連続だったという。

母子寮では、日本人の母親から洗濯物に煙草を押し付けられたりするなどの嫌がらせを受けた。また仕事先の喫茶店では、マネージャーの男性からセクハラを受けた。マネージャーがしつこく身体に触れてくるので、ある時「もう触らないで」とケンカをうった。すると彼は、客の前でわざとマリアに仕事をミスさせたり、彼女をからかって笑うなどの嫌がらせを繰り返すようになった。また別れた夫も、彼女の居場所を突き止めて連絡をするようになった。

そのようなストレスが重なって生理も止まり、息ができなくなる発作に悩まされた。安定剤を飲むことである程度は発作を抑えられるようになったものの、薬を切らすと度々発作に襲われた。元夫が耳元で「お前を殺すぞ」と囁く声が聞こえるので、布団を頭までかぶって、息子に誰もいないかを確認してもらい、必死で気持ちを落ち着けようとした。

しかし彼女は、元夫から受けたトラウマや職場でのハラスメントに悩まされながらも、新たな人生を模索し、少しずつ切り開いていった。母子寮では長女がいじめられ、日本人の母親から「フィリピン人だから話にならない」などと言われて悔しい思いを何度もしたため、必死に日本語を勉強して母親の会で涙ながらにこう訴えた。「私たちがここにいるのは、がんばるため。それぞれ問題を抱えているけれども、この場所に私たちがいるのは自立するため、いじめるためじゃなくて。」

こうした努力が園長に認められ、彼女は3年目には母子寮のリーダーになった。そして現在は母子寮を出て自立し、バザール・カフェと介護施設で働きながら4人の子供を育てている。

#### 4-5 境界線を浸食する「癒しの共同性」

従来、日本で深刻な受苦に直面したフィリピン人女性がそれを克服していく契機として、NGOの支援が重視されることが多かった〔ドーン編 2005；カラカサン・反差別国際運動日本委員会編 2006〕。しかし、マリアが苦しみ淵から少しずつ立ち直っていく過程では、新しく出会ったフィリピン人留学生の存在も大きな支えになったという。

母子寮に入ったばかりで日本人の母親たちから嫌がらせを受けていた時、母子寮前の公園にフィリピン人らしい若者が一人座っていた。気になったので英語で「あなたフィリピン人？」と聞いてみたところ、彼は一人で落ち込んでいたらしく、いきなり抱きついてきた。彼は京都大学で経済学を勉強していたゲイの学生だった。お互いタガログ語で話をする人があまりいなかったから、悩みを話し合う仲になった。

彼が帰国した後も、彼女は教会やバザール・カフェなどで出会った多くの留学生たちと親密な関係を築いていった。新しい留学生がやってくると、ゴミの出し方を教えたり、冬服を与えたり、アルバイトの情報を提供したりするなどの面倒をみるようになった。とくに、学生たちにフィリピン料理を振る舞うと、学生は喜んで「今度はこれが食べたい」とお願いしてくるようになった。そんな関係を彼女は「お母さんみたい」という。また学生

の両親が日本を訪れることがあると、彼らが学校で忙しい間、マリアが彼らの両親を観光案内に連れていったりもする。

このような階層を越えた親密な関係は、フィリピンではあまりみることができない。フィリピン社会では、異なる階層の間には、大きな社会文化的な境界線が存在する。前述のように、富裕・中間層は言語や服装、振る舞いなど様々な標識を用いて、自らの優越性をアピールする。他方、貧困層はより豊かな者に対して、「(場違いで遠慮して) 恥ずかしい」(ヒヤ：*hiya*) という感覚を抱き、自らあえて近づくことを避ける傾向がある。これは、社会的上位者によって軽んじられたり、正当に扱われず、自らの尊厳が傷つけられたりする危険性を避けるためである。もっとも、社会的上位者があからさまに彼らを見下すような態度を取ると、「傲慢だ」(マヤバン：*mayabang*) という道徳的審判を下す。このような慣習は、階層を越えた付き合いを妨げ、分断を助長する。

しかし、日本で20年以上にわたって暮らし、流暢な日本語を駆使するマリアは、フィリピン人学生や教授からも一目置かれる存在である。マリアは学生の紹介を通じて、京都大学を訪れるフィリピン人の教授たちとも親密な関係を築いてきた。あるフィリピン人教授は、京都を訪れる際には必ず彼女に会っている。マリアは大学教授と付き合っている、もはや「恥ずかしい」という感覚はない。あるとしても、「フィリピンにいる時は、UP (国立フィリピン大学) はすごいなあってイメージあるでしょ。でも今はUPのプロフェッサーと話をしている。なんか、まさかあっていうか」といった感覚にすぎない。

ただ、他の母親のなかには、KAPS (Kyoto Association of Pinoy Scholars) という学生組織のイベントに顔を出したりして学生と付き合いたいけれども、「恥ずかしい」と感じている人もいるという。

この方は、名前は出さないけれど、KAPS とかと友達になろうとしているけど、「へ、あの人たちすごいな。私も入っていいの」みたいな気持ちはある。傲慢と思うからじゃなくて。ディナたちのレベル、フィリピン人にとったらすごい高いから。「へ、そこ入ってもいいの」って聞くから、「なんで、私も一緒にやで」って言うの。

しかもマリアは、学生に対して「傲慢だ」という感覚を抱いたことはない。逆に、彼女が「傲慢だ」と感じるフィリピン人は、しばしば同様の経験をしてきたはずの元エンターテイナーの母親のなかにいるという。

傲慢な学生はいない。学生はすごいみんな素直やね。学生言うもん。会った時に「ハイ、アテ〜 [お姉さん]」とか。学生はあたたかい。「メールするね」って言ったら本当にする。すごい素直やなって思う。KAPS のメンバーはみんなコンフィデント [自信をもってしっかりしている]。せっかく仲がいいのだから、人の噂話はしない。一人の問題をみんなで考えて解決する。他のフィリピン人は、むりやり [足を] 引っ張るかんじ。KAPS は反対にアップしてくれる。だから、それを一番尊敬している。

でも、これははっきり分かる。こっちに来ているお母さんでもう結婚している、す

ごいマヤバン〔傲慢〕な人は、本当にマヤバンだから。自分の自慢話ばかり。ものすごく鼻が高い人は高いから〔手も〕届かないみたい（笑）。ジョークがあつて。「ほら、しっかりカバン持って」って。きつつい風がくるから（*mahangin*）、「しっかりつかまって」（*kapit mabuti ha*）って（笑）<sup>20</sup>。

このような逆転が生じるのは、同様の経験をしてきた者同士の間でほど、しばしば社会的上昇の程度などをめぐって、自らの優越性を主張して差異化を図ろうとする傾向があるからだと考えられる。逆に、経験と背景を異にするマリアと学生の間では、そのような優越性の競合は生じない。

マリアが学生との付き合いで最も感謝しているのは、異国の地でシングル・マザーとして働きながら子育てをしている彼女の悩みを良く理解して、助けてくれることだという。とりわけ彼女がここ数年でとくに仲良く付き合っているディナとジェイからは、悩み事や問題がある時にいつも支えてもらっているという。

私も悩んでいて、もうバーっと泣きたい時には、彼らに「泣く！」って言うのね。一回、子供のこと〔次男が少年院に収監された〕ですごく悩んでいて、でもジェイ、きはって、「泣けないの？いま泣いて！」って言われて、ずっと泣いて。で、「話なに？」って。ディナも「またか、アテ・マリア」って。そこで本当の友達やなって分かった。なんでかって、悩んでいると必ず家に来てくれる。何があっても。

考えたらレベルが違うでしょ。ジェイ、ものすごい頭良くて勉強優秀な子で、私はお母さんで。でも、私のシチュエーションを分かってくれている。ディナもそう。

一回ね、おばかだから友達のクレジット・カード使って。友達がこのカードうまく使ってって私が言われて。で、けっこう借金になったから。支払いが次々あったから。30万くらい。ばかの時もあるから、私。すごい怒られて。ジェイとディナが、一生懸命私がそこから抜け出すために。本当の友達やなあと。二人がマクドに呼んで、「ほんとのこと話して、どこどこでお金かりた、何に使った、毎月なんぼ入ってくる」とか。そこまでみんな考えてくれている。どうしても払わないといけなと言われてたから。で、ジェイは「僕は月にこれだけあるから、これは出せられる」って。払えるために二人が一生懸命考えてくれている。まさかここまで友達がいると思って。本当の友達だなって。

だから、すごく人間としての、あ、私は友達がいるんだ、という気持ちが強い。私はみんなに守られている。いろんな意味で。お互いの気持ちの助け合いかな。

彼女が「助け合い」と言ったのは、学生も彼女にプライベートな悩みや問題を相談し、お互いに癒しを与え合っているからである。たしかに、ディナやジェイは階層や学歴といったカテゴリーでは優位な位置にいる。しかし、彼らも生のあらゆる面において優位にいるわけではなく、ある面では被傷性を抱えて思い悩んでいる。たとえば、ディナは若くして乳癌にかかって治療を受けている。そのような時に、マリアは彼女が安心して悩みを打

ち明けられる親密な友人の一人であった。また、ジェイは自分のセクシャリティに悩みを抱えており、京都に来たばかりの時、毎日のようにマリアに電話をした。マリアはその時のことを次のように語った。

ジェイも自分のプライベートがあって。その時は、自分がゲイなのって言えなかったの。で、私が「なんで恥ずかしいの？ 人の自由でしょ」って。最初、ジェイが「私のこと嫌い」って聞いたの。「え、なんで」、私の方がびっくりした。「なんであんたが嫌なの？ 私はそうじゃないよ。友達は友達」。ジェイはすごく悩んでいた。いまはオープン。でも京都では最初は私とディナだけかな。さみしいとか落ち込む時、電話かかってくる。

ジェイはすごい大変な勉強しているから。私どうやってサポートできるかな。だから私、笑顔だけ。それしかできないから。だって教えられないから。その、ものすごく頭いいから、あの人。で、料理、「美味しいご飯つくったらからおいで」って。まあそれだけかな。サポートというか友達として何ができるかなって。

二人は私の母子家庭のシチュエーションをすごい分かってきている。そこが私は認めてほしい。ジェイは自分がこれ〔ゲイ〕だから、それを認めてほしい。だからアクセプタンス。お互いに。

彼らが織り成す親密な関係は、階層の境界線だけでなく、道徳の境界線を越境している点にも特徴がある。たとえば、かつてエンターテイナーであった、子供が罪を犯した、他人のクレジット・カードで多額の借金をしてしまった、カトリック教によって否認される同性愛者である、そうした特定の道徳的見地からは「悪」とされることでさえも、お互いに承認される。むしろ、公共的な場において道徳的に「悪」と断罪されることの苦しみを癒し、そこから解放し合うのが、彼らの親密な関係である。そして、癒しの媒介として重要な役割を持つのは、郷土のご飯や仲間の笑顔である。

マリアは、ディナとジェイとの関係を「なんかまるで最初から知っているみたい。ルクソ・ナン・ドゥゴ (*lukso ng dugo*)」と表現する。この言葉は、文字通りには「血の跳躍」と訳すことができ、「本来関わりのなかったはずの他者と、まるで昔から血のつながりがあったかのような親密なつながり・共同性をデ・ジャヴュ的に発見して互いに喜ぶ」という意味を持つ。

それでは、このようなフィリピン本国ではありえなかったような階層を越えた親密な関係が、在日フィリピン人社会で創出されていく契機となっているのは何か。まず、教会、バザール・カフェ、NGO の APT といった出会いの場である。マリアは教会をベースとする Pag-asa の活動や、かつて自分が支援を受けた APT の活動にも積極的に参加している。また、同胞の境遇に関心を持つ学生や大学教員たちも、このような場に積極的に顔を出し、様々な活動に携わっている。それゆえ複数の接点ができ、階層を越えた親密な関係が形成されるきっかけになっている。

次に、時間の経過に伴う元エンターテイナーの高齢化である。在日フィリピン人エリー



トは、若く派手に着飾ったフィリピン人女性を敬遠する。しかし、彼女たちは仕事を引退して子育てをしているうちに、親しみ深い「お姉さん」や「お母さん」となっていく。こうして、かつて彼女たちに付与されたスティグマは消失しないまでも相当に薄められ、新たな人間関係が形成されやすくなる。

それから、個々のパーソナリティや経験がある。たしかに、在日フィリピン人エリートの中には、高等教育を受けた「我々」として、元エンターテイナーの女性から自らを差異化する者もいる。また、「良いフィリピン人」たることを心がけ、苦境にある同胞を支援しようとする者もいる。だが彼らも、常に強く優位な存在ではなく、異国の地で様々なストレスにさらされ、プライベートな問題を抱えて癒しを欲する弱い人間である。そのような時に、自らの心を開くことができれば、元エンターテイナーの年配の女性は甘えさせてくれる身近な「姉」や「母」になりうる。そして親密さの程度が深まってくると、差異はもはや優劣の言葉で語られなくなり、癒しを与え合う親密な相互依存の関係が形成されていくのである。

## 5 おわりに

本稿では、フィリピンでは出会うことのなかったような在日フィリピン人エリートの学生と、元エンターテイナーの女性が織り成す「癒しの共同性」に焦点を当てた。両者は育ってきた背景も日本での経験も大きく異なる。学生はフィリピンの一流大学を卒業し、日本政府の国費留学生として学位を取得し、日本の大企業や大学に就職でき、またフィリピンに帰っても社会的地位の高い仕事を約束されている。他方で、元エンターテイナーの女性は、貧しさから抜け出そうと、あるいは新たな人生の可能性を切り開こうと不確かな未来に身を投じて、支配的な構造に翻弄されながら様々な苦難を生き抜いてきた。

フィリピン本国で両者が親しい関係を結ぶことは、きわめて稀であろう。在日フィリピン人社会でも、少なからぬ学生が、元エンターテイナーを道徳的・階層的に劣位に置く既存の境界線と序列を再生産していた。しかし学生のなかには、こうした境界線を越えて、かつてエンターテイナーだった女性と癒しを媒介にした相互依存の関係を育んでいく者もいた。

こうした癒しの共同性の特徴は何か。まず、この共同性は、しばしばアイデンティティの政治の基盤となるような、「フィリピン人」を規定する何らかの人種的・本質的・土地的な要素に基づいていない。また、特定の組織や制度によって関係が担保されているわけでもない。さらに、この共同性を成り立たせているのは、合理的な討議を媒介とするハーバマスの公共性でも、無限の他者の前で個人が強く現れるアーレント的な公共性でも、「公共善」の実現を目指す共和主義的な道徳的市民の連帯でもない。

在日フィリピン人社会では、国籍、階層、ジェンダー、道徳、病など様々な境界線によって自らの生に様々な弱さや脆さを抱く者たちが、それぞれの痛みや苦しさをそっと打ち明け、耳を傾けて受けとめ、笑顔や故郷のご飯を通じて癒しを求め与え合うという、相互依存の関係を紡ぎだしている。苦しさへの癒しを欲しない者はフィリピン人であってもこ

の共同性に参画することはないが、それは苦しみや痛みを抱えて癒しを希求する者には大きく開かれている。いわば、癒しの共同性の基盤は、何らかの本質的な同質性や、自立した強い近代的個人の公共性ではなく、か弱き個人が生ずる被傷性に対する自発的な共感・共苦を軸に織り成す、公的な道徳や合理性を超えた相互依存なのである。そして、この癒しの共同性は、限定的な人間関係を基礎としながらも、自分の受けた癒しを次の人にも届けようとする連鎖を生みだし拡大し続けることで、私的な関係を超えた可能性を帯びる。

たとえばマリアは、かつての自分と同じように日本社会で困難を抱えて苦しむフィリピン人女性に対して、今度は自分から癒しを与えようとしている。彼女のもとには、京都だけでなく北海道や松山といった遠方に暮らすフィリピン人からも助けやアドバイスを求める電話がかかってくる。NGOの電話番号を紹介しても、「恥ずかしい」と言って繰り返し彼女のところに連絡がくる。ある時には、午前2時にひどく泣きながら「私、もう自殺する」と電話がかかってきた。彼女自身も問題を抱えたままであるので、人の悩みを聞くのはストレスになる。しかし、それでも悩みを訴える人びとの声に耳を傾け続けている理由を、彼女は次のように語る。

うれしかったのは、自分がまあ、そのなんていうの、できるんやなって。困ってる人のちょっとでも助けができる。たとえば、重たく悩んでいたフィリピン人に、ちょっとでも希望？ 希望ができたなって。悩んでいる被害者を、それ以上苦しめないで、なんか、安心してほしいから。だから声を聴く。

このように、在日フィリピン人社会とは、深刻な不平等によって分断されたフィリピン社会では接点のなかった人びとが互いに会おうとする接触領域に他ならない。そこでは反目や軋轢が再生産されるだけでなく、生の被傷性と癒しを媒介に新たな共同性が創出されていた。そして彼らが紡ぐ癒しの連鎖は、グローバル経済や支配的な構造のもとで人びとを優劣に切り裂く道徳的・階層的な境界線を浸食しつつ、共感・共苦の共同性を拡大しているのである。

#### 注

- 1) 他には、「青い海と白いビーチ」「ヤシの木」といったトロピカルなイメージがある。
- 2) トレンティーノ [Tolentino 2004] は、ルビー・モレノが出演した映画を論じて、戦後に去勢された日本と日本人男性が、失った男らしさを再主張しようとするために、第三世界の女性として二重に抑圧された女性性を消費していると指摘している。
- 3) これとは対照的に、『あふれる熱い涙』（1992年、田代廣孝監督）は、絶望的に貧しく不平等な権力関係に翻弄されるフィリピン人女性を描くことで、観衆がフィリピン人女性に感情移入することを可能にする。しかし同時に、自らでは困難な状況を打破できず、日本人に救われることでしか幸福を得られない犠牲者としてフィリピン人女性を描くことで、フィリピン人に対する日本人の家長的な権力関係を再生産している。
- 4) ゴウは80年代後半に来日し、在日フィリピン人女性を支援する活動を展開した。彼女は、ドラマ『フィリピン人を愛した男たち』が、在日フィリピン人女性を「金銭を得るために男を利用するずる賢い売春婦」として描いていると批判し、脚本・監督を担当した水島総とフジテレビに抗議

状を送りつけた。

- 5) 東は正しいイメージを伝えているものとして、今藤 [2004]、ドーン編 [2005]、佐竹&ダアノイ [2006]、白野 [2007]、映画『恋するトマト』（2005年、南部英夫監督、大地康雄企画・脚本・製作総指揮・主演）を挙げているが、それらが本当に日本社会における支配的なフィリピン人のイメージを転換したかは疑わしい。また、いずれもがフィリピン人女性に共感的であるが、エンターテイナー・ビジネスというステレオタイプな事例を主要なテーマとして扱い続けている点にも留意する必要がある。
- 6) ただ、支配的な表象がエンターテイナーから看護師・介護士に変われども、日本人を「ケア」するフィリピン人女性という基本的な構図は継続されていく可能性は高い。
- 7) このデモの様子は、インターネットの動画サイト YouTube で視聴することができる。
- 8) バレスカス [1994:116-132] は、フィリピン人の道徳的退廃を招いていると指摘して、フィリピン人女性エンターテイナー・ビジネスの全面禁止を主張している。
- 9) 毎週日曜日、日本にある多くのカトリック教会はフィリピンになる。様々な地域に離れて暮らす日フィリピン人たちは日々のストレスからの発散や、仲間とおしゃべりをする楽しみを求めて教会に集まる。視界に映るのはほとんどフィリピン人ばかりで、それは、もはや日本の風景ではない。そこではタガログ語やフィリピン各地の言語、楽しそうな笑い声、子供たちの騒ぐ声が飛び交う。
- 10) 私がスムーズに京都のフィリピン人社会に入ることができたのは、長年京都で調査を行ってきた永田貴聖氏による紹介が大きい。改めて感謝したい。
- 11) このような表記が職業スティグマを助長する危険性是否定できないが、他に妥当な言葉を見出せなかったため、便宜的に用いることにした。
- 12) 2009年8月16日、彼は福岡在住のためスカイプにて電話インタビュー。
- 13) 2009年8月2日、三条鴨川のとおりでインタビュー。
- 14) 2009年8月6日、バザール・カフェにて、後述のディナとのインタビューのなかで、彼女の友人の経験談として聞いた。
- 15) 2009年8月17日、彼女は東京在住のためスカイプにて電話インタビュー。
- 16) 吉澤論文では、Aさんとして紹介されている。
- 17) 2009年8月1日、三条大橋スターボックス・コーヒーにてインタビュー。
- 18) 2009年8月6日、バザール・カフェにて、2011年4月15日、彼女の自宅にてインタビュー。
- 19) 2011年2月15日、2月23日、4月19日、著者の研究室にてインタビュー。
- 20) フィリピンでは、傲慢に自慢話ばかりする人を「風が強い」(*mahangin*)という言葉で揶揄する。

#### 参考文献

- 東賢太郎 2009 「表象・イメージ・現実——在・滞日フィリピン人女性表象の変遷から」『宮崎公立大学人文学部紀要』17(1):1-7。
- アパデュライ、アルジュン 2004 『さまよえる近代——グローバル化の文化研究』（門田健一訳）平凡社。
- 今藤 元 2004 『奥さまはフィリピーナ』彩図社。
- 笠間千浪 2002 「ジェンダーからみた移民マイノリティの現在——ニューカマー外国人女性のカテゴリー化と象徴的支配」宮島 喬・梶田孝道編『マイノリティと社会構造』東京大学出版会、pp. 121-148。
- カラカサン——移住女性のためのエンパワメントセンター・反差別国際運動日本委員会編 2006 『移住女性が切り拓くエンパワメントの道——DVを受けたフィリピン女性が語る』反差別国際運動日本委員会。
- 日下 渉 2008 「フィリピン市民社会の隘路——「二重公共圏」における「市民」と「大衆」の道徳的対立」『東南アジア研究』46(3):420-441。
- ゴウ、リサ&鄭暎恵 1999 『私という旅——ジェンダーとレイシズムを越えて』青土社。

- 佐竹眞明&メアリー・アンジェリン・ダアノイ 2006 『フィリピン—日本国際結婚——移住と多文化共生』 めこん。
- 清水 展 1996 「日本におけるフィリピン・イメージ考」『比較社会文化』2:15-26。
- 徐 玉子 2008 「性産業に携わる外国人女性たちの表象とエイジェンシー——在韓米軍基地村のフィリピン人女性「エンターテイナー」の事例から」『Contact Zone』2:71-88。
- 白野慎也 2007 『フィリピーナはどこへ行った——日本から消えた彼女たちの「その後」』 情報センター出版局。
- 鈴木伸枝 1998 「首都圏在住フィリピン人既婚女性に関する一考察——表象と主体性構築過程の超国民論からの分析」『ジェンダー研究』1(18):97-112。
- 関 恒樹 2009 「トランスナショナルな社会空間における差異と共同性——フィリピン人ミドルクラス・アイデンティティに関する考察」『文化人類学』74(3):390-413。
- 高畑 幸 2003 「国際結婚と家族——在日フィリピン人による出産と子育ての相互扶助」駒井 洋監修・石井由香編著『移民の居住と生活』明石書店, pp. 255-292。
- ダアノイ, メアリー・アンジェリン 2000 「フィールド・ワーク: 出稼ぎ労働の検証——フィリピン人は日本にいるフィリピン人をどう見ているか」会沢 勲編『アジアの交差点——在日外国人と地域社会』[増補改訂版] 社会評論社, pp. 127-151。
- ドーン (DAWN) 編 2005 『フィリピン女性エンターテイナーの夢と現実——マニラ, そして東京に生きる』(ドーン・ジャパン訳) 明石書店。
- 永田貴聖 2011 『トランスナショナル・フィリピン人の民族誌』ナカニシヤ出版。
- バレスカス, アリア・ロザリオ・ピケロ 1994 『フィリピン女性エンターテイナーの世界』(津田 守監訳, 小森 恵・宮脇 摂・高畑 幸訳) 明石書店。
- マテオ, イバーラ C. 2003 『「滞日」互助網——折りたたみ椅子の共同体』(北村正之訳) フリープレス。
- モレノ, ルビー 1994 『銀色の月——28歳の履歴書, 女として, 母として』ぶんか社。
- 吉澤あすな 2010 「緊張と矛盾をはらんで, 揺らく「境界線」——京都におけるフィリピン人留学生の社会的活動」立命館大学産業社会学部提出, 卒業論文。

- Aguilar, Jr., Filomeno V. 1996 The Dialectics of Transnational Shame and National Identity. *Philippine Sociological Review* 44:101-136.
- 2003 Global Migrations, Old Forms of Labor, and New Transborder Class Relations. 『東南アジア研究』41(2):137-161.
- Constable, Nicole 1997 *Maid to Order in Hong Kong at Home: Stories of Filipina Workers*. Ithaca: Cornell University Press.
- Lopez, Mario I. 2012 *Faith, Care and Agency: Everyday Negotiations between Japanese-Filipino Couples in Northern Kyushu, Japan*. Ph. D. Dissertation submitted to Kyushu University.
- Parreñas, Rhacel Salazar 2001 *Servants of Globalization: Women, Migration and Domestic Work*. Stanford: Stanford University Press.
- Pinches, Michael 2001 Class and National Identity: The Case of Filipino Migrant Workers. In Jane Hutchison & Andrew Brown eds. *Organising Labour in Globalising Asia*. London: Routledge, pp. 192-213.
- Tolentino, Rolando B. 2005 Primordial Milk: Japanese Cinema's Representation of the Philippines. In Rolando B. Tolentino, Ong Jin Hui & Hing Ai Yun eds. *Transglobal Economies and Cultures: Contemporary Japan and Southeast Asia*. Quezon City: The University of the Philippines Press, pp. 275-312.